「君が代」考

桑田　明

日の丸を国旗とし、「君が代」を国歌とすることの是非を問う声が揚がるなど、大正生まれの私らにはうたた味気ないご時世ではある。けれども、振り返って見ると、「君が代」の歌がどういう意味なのか、その確かな解釈はなされているのかというと、歴史的見地から信念をもって説く人はいても、国語国文学の方面からそれを説明し証明した人があったことを残念ながら私は聞いていない。今の時世に触発されて、急遽私は駑馬に鞭うち、この事の解明に乗り出したいと思う。

一

「君が代」の歌で、「君」は天皇（聖上）を、「代」は御代を、「君が代」は聖上の御治世（聖代）を意味するととるのが、一般的であろう。しかるに、この歌の原歌（実は異伝歌）と見られる古今歌は、

わが君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで（古今三四三、題しらず、詠人しらず）

となっている。この歌はその異伝歌と見られる

わが君は千代にましませさざれ石の巌となりて苔のむすまで（新撰和歌一六一）（古今六帖二二三四）

（便宜上、本稿の引用歌には適宜漢字を入れる。又その詞書など作歌事情を示す叙述は、要点のみを略記する。）

の歌と見合わせて、「わが君は千代に八千代にましませ、さざれ石の巌となりて苔のむすまで」の意味構造と考えられ、そこから、この歌のもう一つの異伝歌と見られる「君が代」の歌の「よ」は寿命の意で、「君が代」の語を聖上の御寿命（聖寿）の意ととる説が出て来る。こうして「君が代」の語に聖代と聖寿の二様のとり方が出て来るのであるが、中古・中世の賀歌に数多く見出だされる「君が代」の語の用例には、聖代・聖寿のどちらもある中に、聖代の方が隔段に多いようである。例を挙げると、

奥山の八峯の椿君が代に幾度蔭を更へんとすらん（千載六一七、祝、基俊）

君が代に逢へるは誰もうれしきに花は色にも出でにけるかな（新古今七三二、二條院御時の献歌、範兼）

君が代の数には足らじ限なき千坂の浦の真砂なりとも（続

詞花三五六、今上大嘗会歌、俊憲）

君が代は長井の浦に隙も無く群れ居るたづの齢なるべし

（堀河院百首一五八九、祝詞、師頼）

の前二例は聖代の方、後二例は聖寿の方である。

さて、問題の古今歌「わが君は」の歌の大意は、その異伝歌と考えられる前出の「わが君は千代にましませ」の歌のそれと同じと見てよかろう。そのことを認めた上でであろう、北村季吟の八代集抄のこの歌の註には、まずその二句を「君は千世にや千世をかさね、さざれ石の岩保となるまで久しくましませとなり」と解しているが、それは「や」は助詞で「千代に」を詠嘆的に繰り返し強調した言い方だと解したのであり、そう解した上で、「千世にとよみ切て、やちよとよむといふ説もあり」、すなわち「千代に八千代に」の詠み方をとる説もあることを併記している。同じ形の句は

めづらしき今日のまとゐは君がためちよにやちよにただかくしこそ（万代三七六五、行成）

朝日影さしさかえゆく竹の園ちよにやちよに猶ぞ重ねむ

（夫木一六五〇七、為家）

のような歌例にもあり、また

枝ごとに千代もやちよも色かへぬ平野の松は君がまにまに

（夫木一三七三五）

の二句のように、「ちよもやちよも」の例も出て来る。しかし、

わが齢君がやちよにとりそへて留めおきては思ひいでにせよ（古今三四六）（四句の「は」は清音で強調の助詞。）

君が代は朝日の山の玉椿ちりもくもらでやちよこそ経め

（夫木一三八四〇）

のような例の「やちよ」は、明瞭に「八千代」と認められる。そこで問題の歌の場合や続けて挙げた諸例の場合、それぞれその当該箇所のあり方として、「千代に〔も〕や千代に〔も〕」（「千代に〔も〕」をただ詠嘆的に繰り返し強調する言い方）と、「千代に〔も〕、イヤソレドコロカ八千代に〔も〕」（その数を言い直し飛躍させて強調する言い方）とを較べて見れば、後者の方が発想の巧みさと印象の効果においてまさるであろう。それで後世の人は皆後者の取り方に従い、現在に至っているのだと思われる。

ところで、この千代・八千代の「代」はどういう意味なのか。

古に君が三代経て仕へけり吾が大主は七代申さね（万葉十九―四二五六）（大伴家持が左大臣橘諸兄に贈った賀歌。）

この「よ」は人の当主として活動する期間を意味し、「君が三代」は「君の御代三つ」すなわち「聖上御三代の御治世」を意味する。元来「よ」とは竹の節と節との間のように、一つの単位となる区間を意味する語で、時間的には世代・時代、さらに過去、現在、未来の三世、内質的には人の世、六つの世界（六道）、あの世とこの世、世間、それから一生、生涯のような意味に使われる。すると千代・八千代・万代等の「代」はどんな意味か。もし「君が代」の「代」と同じであったとすればどうなるか。「君が代は千代に八千代に……」は「聖寿は千の御寿命、八千の御寿命に……」では通じない。「聖代は千の御治世、八千の治世に……」の意味にとるなら、それは「（体制としての）聖上御統治の御代は永遠に繰り返し存続なさるよう

に……」のような意味となりそうであるが、「君が代」の語を体制としての聖上御統治の御代の意にとっても通じるような用例の歌は、私の見出し得たもの極めて少く、そして「君が代」の語のまずすべての用例で、その「君」は「わが君」（「私ノオ仕エスル君」又は「ワガ親愛ナル君」）の意と解される。従って「君が代」の「代」と「千代・八千代」の「代」とが同一の歌の中で同じ意味であることは、普通には無いと見なければならぬ。

考えられることは、

君が代はながすの滝に年を経て千年重ぬるつるの毛衣（夫木一二三六八）

君が代は亀のを山にすむ鶴の毛衣さへや千代を重ねん（夫木一二五九五）

松風の里にむれゐるまなづるは千年重ぬる心ちこそすれ（夫木一四七〇六）

なみ立てる松が崎なる芦たづは千代を重ぬるためしなりけり（夫木一二一五三）

のような例で、「千年」と「千代」とは同義に使われており、この「よ」は年の意と見る外ない。まことに、年は春夏秋冬一巡して一単位をなす期間で、「よ」の一つであるのにふさわしいのである。そこで「千代・八千代・万代」という語は千年・八千年・万年の意で使われていることが明かに推定されるのであるが、問題の歌は「わが君（聖上）は千年に、いや八千年に亘って……すこやかにましませ」、「君が代」の歌は「君の御治世〔御寿命〕（聖代〔聖寿〕）は千年、いや八千年に亘って……存続なされますように」のような意味と見て通ずるわけである。

二

ところがここに、また新たな問題が生ずる。それは賀歌において一般に、その慶賀する対象の人を「君」と呼称する習慣のあったことによる。例歌を挙げよう。

1　君が代は千代にひとたびゐる塵の白雲かかる山となるまで（後拾遺四四九、三條院の皇太子の時、大江嘉言）

春来れば宿にまづ咲く梅の花君が千年のかざしとぞ見る（古今三五二、本康の皇子の七十の賀に、紀貫之）

2　老いぬれば同じ事こそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ（拾遺二七一、藤原誠信の元服に、源順）

君が代を何に譬へんさざれ石の巌とならんほども飽かねば（拾遺二七七、清慎公の五十の賀に、清原元輔）

3　万代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭に住まんと思へば（古今三五六、良岑のつねなりが四十の賀に、むすめに代りて、素性法師）

雲わくる天の羽衣うち着ては君が千年にあはざらめやは（後撰一三七〇、父宰相の賀に、玄朝法師の贈衣を謝して、典侍明子）

4　君がため松の千年も尽きぬべしこれより増さん神のよもがな（後撰一三七六、女のもとに、よみ人しらず）

右の諸例で、「君」は1では臣下が皇太子や親王に対しての

呼称、2では同じ貴族仲間に対する呼称、3では子が親に対する呼称であり、1はともかく、23は相手を単に長上の人として尊称したものと見てよい。ところが4となると、これは単なる愛人に対しての呼称であり、尊称というより親称とか愛称とかいうものと見られる。慶賀することを「祝ふ」というが、この語は元来「言ふ」から来ており、祈りをその本質とするもので、荘重な言葉を用い、その言霊のはたらきによって希求する結果を招こうとする呪術であったといわれる。そういうこともあってか、元来君主を意味する「君」が転じて、君主ならぬ人への尊称にも親称・愛称にも用いられることになったのであろう。そして

かくしつつとにもかくにも長らへて君が八千代にあふよしもがな（古今三四七、僧正遍昭の七十の賀に、光孝天皇）

の歌では、実に聖上が臣下たる人を「君」と呼称しておられるのである。このような例を見るとき、問題の古今歌の「君」も例外ではなく、聖上を意味するとは限らず、単なる尊称・親称としてアノオ方・アナタ様・アナタのような意味ととるべきなのであろうか。現在国語学・国文学の学者の間にも、そのような意見が多数を占めているようにうかがえる。もう一例、

長浜の真砂の数も何ならず尽きせず見ゆる君が御代かな（金葉三五二、天喜四年皇后宮の歌合に、後冷泉院）

の歌は、聖上の御製であるが、歌合の主催者皇后（寛子）を「君」と尊称ないし親称しておられるものととる外ないであろうか。

「君」がまちがいなく聖上をさすと見られる賀歌は、

蒲生野の玉のを山に住む鶴の千年は君が御代の数なり（拾遺二六五、仁和の御時、大嘗会の歌、詠人不知）

万代にかはらぬ花の色なればいづれの秋か君は見ざらむ（拾遺二九四、天暦の御時、前栽の御宴に、小野宮太政大臣）

君が代は尽きじとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まん限りは（後拾遺四五〇、承暦二年内裏歌合に、民部卿経信）

君が代の数に較べば何ならじ千色の浜の真砂なりとも（堀河院百首和歌一五八六、藤原公実）

のように、大嘗会や宮中の御宴の歌や、内裏の歌合の歌、聖上のお召しによる定数歌などに多く見られ、これらは聖上を対象として賀意を表し奉るものであるが、これらの「君」はアナタサマの通義が場面の特殊性によって聖上をさすことになったのだと見ても通じそうである。

以上のことから、「君」をアナタサマのような意ととることがほとんど通説のようになったのであろうが、これが果たして妥当なのであろうか。

三

問題の歌や

渡つ海の浜の真砂を数へつつ君が千年のあり数にせん（古今三四四）

しほの山さしでの磯に住む千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く（古今三四五）

わが齢君が八千代にとりそへて留めおきては思い出にせよ
（古今三四六）
君が代は天の羽衣稀に来て撫づとも尽きぬ巌ならなむ（拾遺二九九）
君が代を何に譬へむときはなる松の緑も千代をこそ経れ
（後拾遺四三二）
君が代は限りもあらじ浜椿ふたたび色は改まるとも（後拾遺四三五）

の諸例は皆「題知らず詠人しらず」の歌で、その詠まれた場面は皆不明である。これらの歌の「君」のさす対象を推定することは、全く困難である。

ただ問題の歌に限ってだが、難問解決の緒が、実は古今序の文中に在ったのである。まず仮名序には、歌心を興して歌を詠んだ代表的事例として、

1　さざれ石に譬へ、筑波山に係けて君をねがひ、
2　喜び身に過ぎ、楽しび心に餘り、
3　富士の煙によそへて人を恋ひ、松虫の音に友を偲び、
4　高砂住の江の松も相生のやうに覚え、
5　男山の昔を思ひ出でて女郎花の一時をくねる

の五つの場合が挙げてある。すなわち、歌心を興す主要な動機事例として

1　君をねがう　2　喜び楽しみが度を過ぎる　3　人を恋い友を偲ぶ　4　物に触発される　5　懐旧の情に堪えられぬ

の五つが挙げられたわけである。ここで注意すべきは、「君をねがう」が「人を恋い友を偲ぶ」と区別せられ、しかもそれが「喜び楽しみが度を過ぎる」よりも先に第一番に挙げられていることは、「君」に対する心持が最も大切な心のあり方として重要視されていることを意味しよう。この「君」は勿論君主であるが、それは「人や友」が「わが大切に思う人や友」であるように、単なる君主を意味するのではなく、「わが大切に思う君」すなわち「わが主君」でなくてはならぬ。そして1は勿論古今三四三の問題の歌を踏まえるとともに、

筑波嶺のこの面かの面に蔭はあれど君が御蔭にます蔭は無し（古今一〇九五、ひたちうた）

の歌をも踏まえている。右の歌は元来常陸歌で、この「君」は地方君主をさしているのかも知れないが、それを敢えて「わが主君」の頌歌として例歌に用いたのは、1の重要な項目を成立させて問題の歌の本質を明かにするためではなかったろうか。

ところで、「君をねがう」の意味を考えよう。「ねがう」にはこの意味の漢語に念願・願望・渇望・祈願・誓願等があって、具体的には「そうあり〔し〕たいと願う」「そうあっ〔し〕てほしいと願う」「それを得たいと願う」のような種別が考えられよう。そこで「君をねがう」であるが、仮名序の用例ではこれは「君に得たいと願う」の意味にはとれず、「君について願う」「君に対して願う」のような意味にとる外ない。それでさっきの詠歌の動機事例1の記事は、「さざれ石が成長して巌となる」という譬喩を使って、君の万歳ましますことを願い、筑波山に蔭多きことに関係づけて、何物にもまさる君の御蔭（御庇護）を蒙ることを願う」のような意味にとってよいかと思われる。

仮名序にはまた、

①今すべらぎの天の下しろしめすこと……あまねきおほんうつくしみの波八洲の外まで流れ、広きおほん恵みのかげ筑波山の麓よりも繁くおはしまして、

②よろづのまつりごとを聞し召すいとま、諸々の事を棄て給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、古りにし事をも興したまふとて、（古今和歌集を撰せしめ給うた。）

③（こうして撰集までも行われたので、）今は飛鳥川の瀬になる恨みも聞えず、さざれ石の巌となる喜びのみぞあるべき。

と書かれているが、これを真名序に照応させると、

①陛下御宇于レ今九載。仁流二秋津洲之外一、恵茂二筑波山之陰一。

③渕変為レ瀬之声、寂々閉レ口、砂長為レ巌之頌、洋々満レ耳。

②思レ継二既絶之風一、欲レ興二久廃之道一。

となる。そして両序の③の相応する部分は、「古いよきものが消滅するという恨みの声も無くなり、微小だったものも成長して偉大なものになれるのだという喜びの声が大きくなった」のような意味で、それとその前後の部分とのつながりは、仮名序では「陛下の仁恵の御政治に加えて、古今集までも撰せしめ給うたので」の意で前につながるが、真名序では前とは「陛下の御仁恵により」、後とは「そういう状況において」の意でつながる。

この両序において、①では「陛下の御恩恵が筑波山の蔭よりも繁い」というところに一〇九五の歌の解が示されており、又③では「（陛下の御仁恵によって）さざれ石さえも成長して巌となるのだ、という喜びのほめ声があがる」というところに、問題の歌の三句以下の解が示されていようと思われる。ところで右の「陛下の御仁恵によって」というのは①②ないし①からの続き柄によって生ずる意味ではあるが、ただそれだけのものではなかった。この譬喩の内容が『余材抄』に引くように、「西陽雑俎云、利州臨江寺石得二之水中一。初方如レ拳。置二仏殿中一、石遂長不レ已。経レ年重四十斤。」という記事から来ているものと考えると、この記事ではその石は仏徳によって成長したものと解されるので、そのようにさざれ石さえもが陛下の御仁恵によって巌にまで成長するという想念が生ずるのも、これまた自然であろうと思われる。

こうして、問題の歌は

わが大君（陛下）は、どうぞ千年に、いや八千年に亘って、その御仁恵によって、伝え聞くあのさざれ石が成長して巌となって苔が生えるに至るが如く、しがない民草の私どもが堂々たる状態にまで成長繁栄させていただけるその時まで、どうぞ御すこやかにおいでなされて、この国をお治め下さいませ。

のように意訳できる歌意だと、その撰者貫之らは解していたと思われるのである。

四

前節には古今序の文中から問題の歌の歌意解釈を導き出して

見たのであるが、もう一つ、この歌意解釈を助ける旁誌となるものが、実は『詩経』の中に見出だせるのである。小雅鹿鳴之什にある天保という詩である。この詩は天子を祝福する詩である。この詩には、天が天子の位を安定して隆盛ならしめ、あらゆる福禄を授けられ、民も生活安定し、君徳を成就させるであろうということを、九つの譬喩を使って叙べるので、この事を天保九如という。この詩は長く且つむずかしいので、『中国古典文学大系15、詩経・楚辞』の目加田誠氏訳の中、全部で六節ある中の第一節と、九如のことを記した第三節・第六節とだけを掲げさせていただく。

天爾が位を安定ずること／げにいと固く／爾をいや厚く恵みて／いかなる福をか予えざらむ／爾をいや増しに増して／よろず多からずということなし

天爾が位を安定じて／盛んならずというものなし／山のごとく阜のごとく／岡の如く陸のごとく／川のみなぎり至るがごとく／いや増しに増さぬことなし

月のみちゆく如く／日の昇るがごとく／南山のいのち永きがごとく／かけず崩れず／松柏の茂るがごとく／子孫いやつぎつぎに継ぎゆきまさむ

この詩と古今の問題歌とはその内容に親近性がある。天保の詩では、天が天子を護って其の位を安定させ、これにあらゆる福禄を授けて下さるというのに対し、古今歌の方は聖上の御仁恵が発して長久に下々に及ぶというところにその発想のちがいはあるが、天子を祝福してその徳を頌める賀歌であることにおいては、趣を同じくするものといえるであろう。

五

慈円の拾玉集中の詠百首和歌は「以二古今一為二其題目一」とあって、それぞれの歌が古今集中の歌をとってそれを題目として詠まれたものであることを示しているが、その題目とされた古今歌中には現存本のと対比して語句の異同がかなりあって、その中の祝五首の各題歌中に入っている問題の歌に相当する歌は、初句が「君が代は」となっている。又顕昭の古今集註には問題の歌のところの初二句が「わがきみはちよにましませ」となっており、その上で「此歌つねにはきみがよはちよにやちよにといへり」と記してある。右の二つの事によって、古今の問題歌のところは「君が代は」を初句としたものも確実に存したことが知られる。ただその伝本が後世見られなくなったというのに過ぎない。

問題の歌が初句を「君が代は」に更えると、歌意はどう変わって来るであろうか。古今の両序で言っている事は、何ら変更されるものではないはず。それで、その解は次のようになるであろう。

わが大君（陛下）の御治世は、千年に、いや八千年に亘り、その御仁恵によって、あのさざれ石が成長して巌となって苔が生えるに至るように、しがない我々民草がりっぱに成長繁栄させていただけるその日まで、どうぞ長く久しく御存続下さいますように。

そしてこの場合、「代」は御治世を意味するが、それは勿論御

寿命の意味を内に含んでいる。

慈円の詠百首和歌で、「君が代」の歌を題とする歌は

さざれ石の苔むす岩となりて又雲かかるまで君ぞ見るべき

（拾玉三五四二）

となっている。この歌の内容である譬喩は、「君が代」の歌と、それに倣ったと見られる既出の「君が代は千世に一度ゐる塵の白雲かかる山となるまで（後拾遺四四九）」の歌との両方のそれを併せていると思われるが、その「君ぞ見るべき」は

今年より枝さしそむる松の木の花の折々君ぞ見るべき（六條修理大夫六四、鳥羽殿北寝殿にはじめて渡らせ給ひしに、松契遐年題）

あまたたび君ぞ見るべき海は山山は白浪立ちかはる世を（頼政三四、祝、二條院御時女房にかはりて）

の二例に見るように、「聖上が御自身の御治世中にそれを見給うにちがいない」の意と思われる。すなわち、慈円は「君が代」の歌意を承けてこれに応えた、「陛下の御仁恵により、あのさざれ石が成長して苔むす巌となってから、猶また更に成長して白雲かかる山となるといった譬喩であらわされるようなおめでたい世の中が現出するまで、陛下の御治世は御安泰で、陛下ご自身がその瑞相を確かに御覧遊ばされるにちがいありません。」という歌意と解し得るのである。慈円のこの歌は、彼が「君が代」の歌意を、前述の貫之らの解していたのと全く同じように解していたことを、証するものといってよいであろう。

この「君が代」に対する考えは、類似の発想として既出の「君が代は天の羽衣稀に来て撫づとも尽きぬ巌ならなむ（拾遺二九九）」や、同じく既出の「君が代は千世に一度ゐる塵の白雲かかる山となるまで（後拾遺四四九）」のような譬喩の歌を生んだ。ここに用いてある譬喩は、前者は八代集抄に「奥儀抄云」として引いてある「四十里四方の岩を三年に一度梵天より下りて、三銖の衣にて撫でてなでつくしたるほどを一劫といふ」の経説、後者は「塵積って山と成る」の諺（日本国語大辞典には大智度論九四の「受二此業果報一則難レ可レ得」度、譬如下積二微塵一成レ山難上レ可レ得二移動一」によるとする）によるであろう。ところで、後者の「君」はまだ御即位前の皇太子をさしている。こちらの「君が代」は「やがて来るべきわが君の御治世」の意味と見ても通じるかも知れないが、しかし右の両者ともに、その「代」を御治世の意に限定して解することは困難であろう。

六

いかるがや富の緒川の絶えばこそわが大君の御名を忘れめ

（拾遺一三五一、飢人の聖徳太子への返歌）

この歌の「わが大君」は事実上皇太子をさしているが、歌の心情から言えば、これはほとんど絶対者とも渇仰し帰服する精神的主君とも言うべき尊者を意味しているであろう。こういう所から発して、自分の敬愛できる偉大さをもち、何らかの点で自分が恩恵を受けていると感じるような対象の人をも「君」として仰ぎ、或いは青眼に視るようになるのも自然である。一方、わが君と仰ぐ対象には、その人に対する尊敬や親愛の気持がその人の身内にまでも拡張して及ぶようになり、「君」の呼称も

その身内にまで準用されるようになる。こうして、「君」が君主から主君へ、さらに転じて尊称となり、親称となり、愛称となって、「君」に対する意識も大いに幅が拡がってゆくことになる。古今以下の賀歌には、その「君」に対する心情にも多様さがうかがえようと思う。

従って、君を使用した一つ一つの歌は、その詞書によって場面を考え、その心情を推測して、歌意を考える以外にない。それで、第三説のはじめに挙げた、問題の歌以外の諸例のような「題しらず詠人しらず」の歌では、「君」のさす対象はあれこれ想察されて一つに限定することが出来ないが、これはやむを得ないのである。ただこういう事は言えよう。「君」が統治者たる主君の意から、尊者ないし親愛なるお人の意に変わると、「君が代」の「代」は御治世から変わって単なる御寿命の意になってしまうということである。

七

少し、新たに問題になる歌を挙げて、その解釈を試みておこう。

君が代は天つ児屋根の命よりいはひぞそめし久しかれとは
（金葉三四五、宇治前太政大臣家歌合に、中納言通俊）

君が代は曇りもあらじ三笠山峯に朝日のささん限りは（金葉三四六、同じく、大蔵卿匡房）

これらは太政大臣頼通の家の歌合という場面から考えて、八代集抄に「此君は頼通公なるべし」とあるのに従うべきかのようでもあるが、後例の「曇りもあらじ」からは、「代」が寿命では合わない。これらの「君が代」はやはり御当代聖上の大御代を意味し、天児屋根命は藤氏の祖神、三笠山ないし春日の神は藤氏の氏神であるので、藤氏の御守護により御当代聖上の大御代は曇りなき政治が行われ、久しく栄えますであろうという歌意の中に、歌合の主催者頼通への敬意が示されているものととりたい。

長浜の真砂の数も何ならず尽きせず見ゆる君が御代かな
（金葉三五二、天喜四年皇后宮の歌合に祝の心を、後冷泉院）

この歌、八代集抄には「長浜のまさごの」について「長浜、八雲伊勢云々」とある外何の註も無い。この「君が御代」をわが大君の御治世の意にとると、いわゆる自敬表現だということになるが、古今三四七の歌の場合に準じて解すると、「君」は皇后寛子（関白頼通女）をさすことになり、「君が御代」はアナタノ御寿命の意になろう。もし前者の方をとれば、いわゆる自敬表現は実はその御地位を重く見る表現として、「君が御代」は「聖上たる我の祖神より託された重大な意義のある治世」のような意味だと考えられることになる。しかしこのような意味の「君が代」の用例は外にまだ見当たらないので、今はこの「君」を尊称ないし親称の方に見ておきたい。

積るべし雪積るべし君が代は松の花咲く千たび見るまで
（金葉三五一、返し、六條右大臣）

これは、中宮寛子がはじめて内裏へ参上された夜、雪が降った。雪の積もることは吉兆とされていたらしい。これを喜んだ中宮の養父方の祖父宇治太政大臣頼通は、「雪積る年のしるしに

いとどしく千年の松の花咲くぞ見る（金葉三五〇）」という歌を中宮の実父六條右大臣顕房の許に遣した。その返歌が右の歌である。八代集抄に、「松花は、万葉によみしを、童蒙抄に松花は千年に一度咲云々。此歌、雪を松花に見なし給へり」とある。贈歌は「今年は雪が積もるめでたい年であるという吉兆がもたらされた上に、さらに加えて、千年に一度の松の花が咲くのまでも見ることだ」の意。返歌の意味は、「積もるでしょうよ、雪がきっと積もるでしょうよ、君が代においては、今年のみか、松の花が咲くのを千度も繰り返して見るまで（千年の千倍に至る年までも）」の意。この「君」は中宮をさしているにちがいないが、「代」は寿命の意ではなく治世の意でなければ歌意が成り立たない。ここは中宮を含めて御当代の皇室を意味し、その意味で「君が代」は御当代の御治世を意味すると考えられる。

八

「君が代」に対して「わが代」という語がある。

君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな
（万葉一、一〇）

の「君が代」「わが代」の「よ」は共に一生・寿命の意である。ところが次の例の「わが世」ないし「世」の「よ」はそれとは全く別の意である。

1　色は匂へど散りぬるをわが世たれぞ常ならむ（いろは歌）

2　この世をばわが世とぞ思ふ望月の闕けたる事も無しと思へば（続古事談五、道長）

3　わが庵は都の巽しかぞ栖む世をうぢ山と人は言ふなり
（古今九八三、喜撰法師）

1の「わが世」は我々ノ住ム世ノ中の意、2の「わが世」はワガ物デアル世ノ中（自分ガ支配スル世ノ中）の意。3の三四句は敷衍すると、「しか（然・鹿）ぞ栖む世デアルモノヲ誤解シテ世を憂ガッテ遁レ栖ム宇治山ダと」のようになり、その「然ぞ栖む世」は「ゴ覧ノ通リニサ自由気侭ニ住ンデイルわが世」の意で、その「わが世」は自分ノ気ニ入ッタ世界のような意であろう。ここに三通りの「わが世」（我ノ世）が出て来たが、そのそれぞれの「世」の「我」に対するあり方は、1と3では所住概念、2では所領概念となっている。これに対し、「君が代」の「代」の「君」に対するあり方は、御治世の場合は所司概念、御寿命の場合は所享概念ということになる。又君ノ御治世の意の「君が代」は、少しちがった角度から見ると君ノ御時世ということになる。歌の詞書に「仁和の御時」「後冷泉院御時」のように書いてあるのがそれである。この場合、「御時」は「君」の所在概念となっている。

九

本稿の結論を述べよう。「君が代」の語の本義は「わが主君の御代」であり、その「御代」は御寿命を意味する場合もあったが、それよりも御治世を意味する方が多く、また御治世の意の中に御寿命の意を内包する場合もあった。ところが「わが主

君」が単なる尊称に転じ、さらに親称・愛称にまで転じて来ると、「御代」は単に御寿命を意味する語に変わって来るのである。「君が代」の語の沢山の用例の意味は、どうしても詞書によって歌の場面を考えないと解釈決定ができないが、その手順を履んで解釈すれば、解明はまず可能だといってよかろう。そして「君」が聖上を、「君が代」が聖代や聖寿を意味する歌は、いつの時代にも賀歌の中心であり、数の上からも最も多かった。国歌「君が代」は、そうした伝統の上に立つものであり、その渕源となった古今歌「わが君は」ないし「君が代は」の歌の意味は、古今序にその撰者紀貫之らが明かに示してくれているので、これをあれこれと動かすことは出来ない。しかもその「わが君は」ないし「君が代は」の歌の意味は、たとえ古今序に何も言及していなかったとしても、「君の御仁恵により」という條件が作用することによってはじめて、「さざれ石の成長して巌となる」の譬喩の意味が全くなるのであり、「どうぞいつまでも御すこやかで、御治世が久しく続いて下さいますように」の願いを籠めたものと見て、その歌意は全くなるのであるから、これはどうしても聖上に対する献歌ないし頌歌であると見なければならない。国歌「君が代」の解釈は、これによって決定できると思うのである。

なお、古今三四三の「わが君は」の歌について、八代集抄には、「此歌、拾遺集には安法法師が歌也」と記してあるが、現存の拾遺集や拾遺抄にはそれに該当するような記事は見当たらない。しかし此の歌ないし国歌となった「君が代」の歌も、それに類する歌意の拾遺二九九や後拾遺四四九の歌も、皆仏教に縁のある説話に譬喩の典拠をもつらしいことは、興味あることといえよう。

（くわだ　あきら・元就実女子大学教授）